# 罪と罰

前田診療所　奥田麻子

その時私はわが目を疑った。私の車がない！確かにそこに止めたのに。

思わずうろたえ、もともと自分の契約している駐車の場所も見に走った。が、やはりそこにも車はなかった。出勤しようとしていたのだが、普車がなくては毎日使うパソコンやその他数々の荷物を運べない・・・。もう一度、車があったはずの場所に戻り、あちこち探しまわった。やっとのことで見つけたのは、車を止めていたはずのその場所、乗り上げてあった歩道のアスファルトに、ガムテープで止められた張り紙だった。
なんとそれには、自分たちが車を持ち去ったという内容のことを堂々と書いてあり、おまけに返して欲しくば〇万円の金を持ってくるように、ということ、金の受け渡し場所までしっかりと指定され記されていた…。

仕方なく職場にパソコン等の重い荷物を持って行くことをあきらめ、最低限の荷物で自転車に飛び乗り、銀行でお金を引き出し、相手の指定の場所へと急いだ。

金の引き渡し場所に着いたのは車が消滅したことに気がついてからゆうに３０分は立っていた。
「金は持ってきた？」
とたずねられたとき、私は手が震えてうまくかばんの中から探し出すことができなかった。
書類入れの中をまさぐったが、なぜか入れたばかりのはずの銀行の封筒が見つからない。何度探しても、どう探しても無かった。
混乱しかけた頭で再びかばんの中をまさぐっていると、相手はこの場に及んでまさか手ぶらでくるようなマネはしないよな…、と言わんばかりの顔で、
「金をあちこち探しまわらんといかんほどたくさん隠してあるのかね」
と、そう言った。
何とかその明らかなイヤミにうまく切り返しをお見舞いしてやりたかったのだが、そんなことよりも封筒を見つけだすことが先決であった。
…結局その封筒は見つからず、仕方なく本当なら朝払っておくはずだった家賃の封筒を出しそこからいくらかを抜いて渡した。とりあえずはそれで相手は納得したようであった。
「あんたの車はここにはない。ここから車で１０分弱のところに、他の者が預かっている。そこで、この紙を渡すように。それと、残りの〇万円は一週間以内にこっちに振り込んでおくように」
そう言って、また地図を渡された。…しかもご丁寧なことに、仕事場とは全く逆の方向であった。
『車で１０分弱、と言われても、私の車はあんたたちが取り上げているんじゃないの！』と言いたかったがなんとか押しとどめた事は我がことながら称賛に値するだろう。
仕方なく私は地図をひったくるように受け取り、また自転車に飛び乗った。

しばらくして、車はなんとか取り戻したのだが、どうも私はすっきりしない。
その夜子どもたちと車で移動しているときに、私が今朝盗まれた愛車をいかにして取り返したかについてを語っていたところ、なんと犯人の一味が堂々と私たちの目の前を走り去って行った。思わず私は叫んだ。
『ぬぬぬぬぬぬぬ！あの人たちなんだって！！母さんの車を勝手に盗んでいった人たち…！うぬぬぬぬぬぬぬ！』
彼らは、白と黒のツートンの車に乗り、その屋根に派手な赤と青の回転灯をつけていた。そう、彼らはできることなら一生世話になりたくない、と巷で噂され、交番と呼ばれる場所に住む集団だった。
…確かに私は駐車禁止である道路ぶちの歩道に乗り上げ、夜中から駐車違反をしていた。
が、そもそもなぜ私が駐車違反をしなければならなくなったのかというと、友人が夜中に親子で我が家に逃げ込んできていたからだ。
事が事であり突然のことであった上、このあたりにはすぐに借りれる駐車場などなかったため、車で来ていた彼女等の駐車する場所などなかった。
もし彼女等が車を路上に置いたとして、もし取り締まりにかかり駐車違反――などということになろうものなら、踏んだり蹴ったりだ。あまりにも辛い仕打ちであろう。
だから私は悪いことだとは知りつつも夜中の４時に、そこに車を止めた。
そう、確かに私が悪い。
したがって、罰金も払う義務があるし、車をレッカーで移動されても文句は言えない。

でも・・・。
しかし・・・・・・。
そうとはいえ・・・・・・。

　やはり私は、一言訊いてほしかった。ドウシテ、ソンナコトヲ、シタノカネ、と。
私は言い訳を訊いてもらいたかった。
　それによって罪や罰則が軽くならなくてもいい。
分かっていて駐車違反ということをしたからには罰金としてお金を取られることも想定していたし、覚悟していた。
確かに悪いことだったし、行動は人のことを考えないその辺りの駐車違反の人たちと同じであることに間違いはない。
　それでも私は話を聞いてほしかった。
たとえしたことが一緒だったとしても、そんな人たちと十把一絡げに扱われたくなかった。

　私は残念なことに今キリスト教信者ではない。
だから、たとえ空で神様がそのことを見つめてくださるのだとしても、わかって下さろうとも、やはり地上のだれかにもわかってもらいたいのだ。
　あの世でハライソに行けるとしても、やはり今、目の前の人にわかってもらえなければ意味がない。

　ああ、大人だって言い訳も聞いて欲しい…！
大の大人で、社会でも一生懸命働く大人には違いないんだけど、甘えるようなんだけど、気持ちを聞いて欲しい！

　その昔、なんだかいっぱいいっぱいで、言葉がきつかったときも、イライラして八つ当たりのようになってしまったときも、夫に『お前は余裕がなさすぎる！』と言われても余裕が出たためしがなかった。
　一生懸命せいいっぱいやっているのに、なんだか遅刻してしまったりしたときも、簡単に攻めるんじゃなく言い訳も一応聞いてほしい！そんな頭ごなしに攻めないでほしい！
物理や数学の公式のように、機械的に事務的に扱わないで欲しい！
甘えているようだけど、一生懸命やったことも、少しは労わってほしい！
そしてせめて家族には、理解してもらいたいし、悪いことをしたのはわかってるけど、それでもやっぱりどこかでかばってほしい…！

　結局私は、その日のうちに子どもたちにわかってもらい、そして労わってもらって、やっと気持ちが落ち着いたのであった。それが私が大人げなくも交番に石を投げ込まなくて済んだ理由かもしれない。
　私にはいつもそうやって聞いてくれる子どもたちがいて、いつも慰めてくれる子どもたちがいて、自分が本当に立ち直れる。
…本当にありがたいことである。
同じように、私も子どもたちが何か間違いのようなことをしてしまったときには、必ず言い訳を聞いてやろうと思うし、背景の事情やいら立ちを察して、そっとサポートしてあげようと日々心に固く誓うのである。

以上

なおこの話は、『罪と罰』、というタイトルだが、ドストエフスキー原作のそれとはなんら関係がない。
　したがって確かに私も『裕福』というものと縁があるとは決して言えないような生活をしているのは事実だが、殺人を犯したことも、刑務所に入ったこともない。誤解のないように。

　ちなみにドストエフスキーの『罪と罰』は、じわじわと罪を犯していく人間、そしてその罰という報いを受ける人間の心理描写がたくみに描かれている話であるが、もうひ

とつ注目すべきだと思う場所がある。

それは極めて簡素に描かれている最後の結末の部分だ。

この最後の最後で彼を正しい道に導いたのは、彼の罪の意識の深さではないし、ましてや裁判でも刑務所でもない。

『彼は悪いことをした人間だ』という他者からの視線ではなく、常に彼のことを肯定的に待ち続けた女性の存在こそが『どうせ俺は前科者だ！』という開き直りを作らずに、本当に彼を更生させたのだ。

人間はロボットでも親の作品でもない。

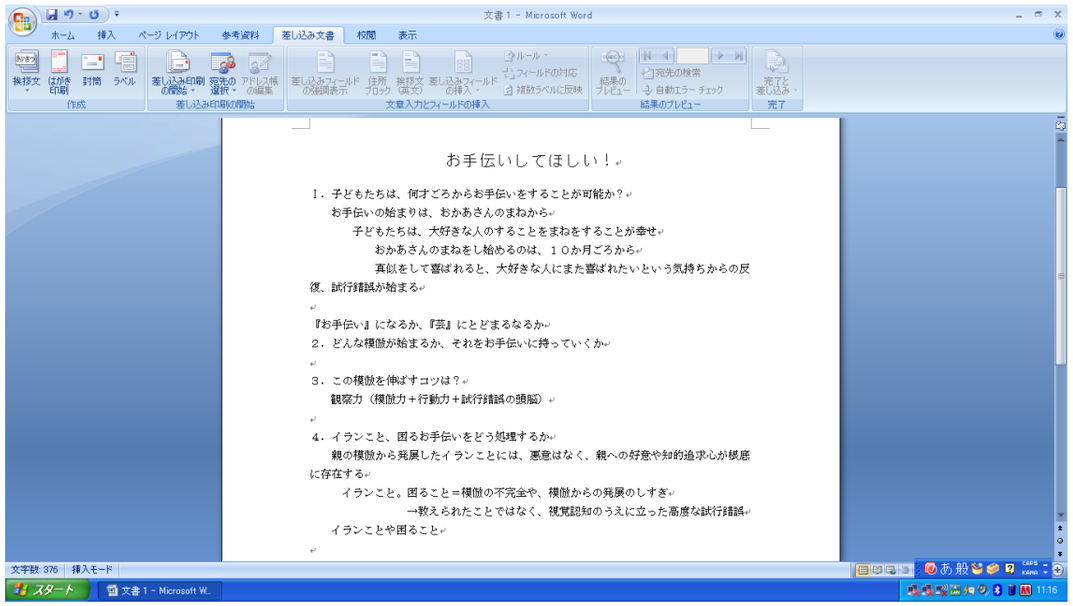
必ずしもよいことばかりをして生きていくものではない。

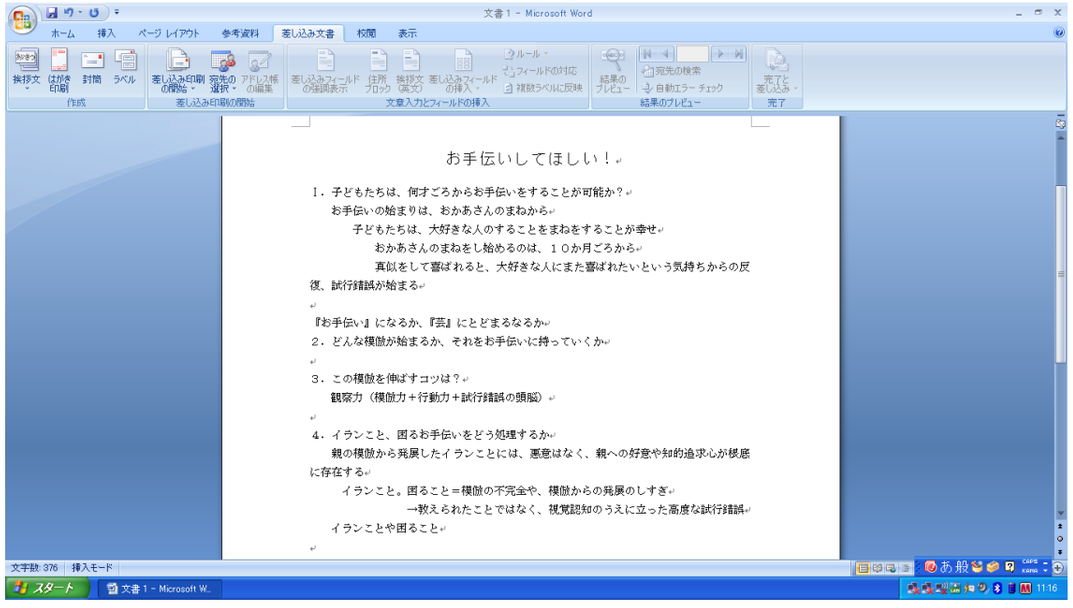
だから悪いことをしてしまったときには、今の子どもも大人でさえも夢中にならざるを得ない、何度でも、好きなようにリセットできるテレビゲームのように『０からのやり直し』ができることは、大切なことである。

人生において、家庭において、これまでの失敗を『またお前は…』『どうせあんたのことだから…』などと、うだうだと持ちだされては社会や大人への反感が育ちこそすれ、事態が改善することはありえい８．ないのだ。

また、家族の中でお互いが向上するためには、この話の結末で出てくる女性のように、悪いことをしても、大人にとって不都合なことをしても、家族間だけは肯定しあうべきではないだろうか。

人間が成長するためには、社会とは切り離された――一般社会で否定されるようなことでも暖かく包んでもら




える空間――空間が必要なのである。良いことしかしたことのない人間よりも、いろいろと試行錯誤し、時には道を踏みはずした人間というものは、さすが一人で修羅場を切り抜けてきただけあって、まじめに大人の言うことを聞いて生きてきた人間よりも

　さらに言及するならば、周囲の大人の言うことをそのままあっさりと聞きいれ、良いことしかしたことのない人間よりも、自分で試行錯誤し、時には道も踏み外してしまった経験も持つ人間のほうが、とっさの機転や融通などがきく人間が多い。まさにかむほどに味がある人々だ。
　また、自分たちがその経験があるがために、悪いことなどをしてしまった人たちに対するあつかいも生まれやすい。
　したがって社会での人付き合いも、他者の扱いも、適度なものを心得やすいのだ。
いくらかではあるが、自分の言うことを聞かない子どもを怒りまくる人間にもなりづらく、したがって、子育ても柔軟で、試行錯誤しその時々の子どもの状態によって対応を考えなおす等の手段を講じることも自然にできる。
あてにならな育児書など投げ捨てて子どもと向き合う彼らの子育てには、とても温かなものがあるのを感じるのは私にとって本当にうれしい限りである。

おしまい。